埋文にいがた

MAIBUN

新潟県埋蔵文化財センター
MAIBUN NIIGATA
2019 Dec.
第109号

発掘調査整理遺跡紹介

弥五郎遺跡・丘江遺跡Ⅶ

上越市 古屋敷割遺跡

平安時代 溝の調査　令和元年10月撮影

2019年度
発掘調査
遺跡の紹介

弥五郎遺跡
―古墳時代の集落―

所在地：上越市三和区米子字谷内割

高田平野の東部に位置する弥五郎遺跡は東を米山、西は妙高山を望み飯田川と桑曽根川に挟まれた標高約16mの沖積地にあります。発掘調査は平成31年４月から令和元年11月まで行い、調査面積は3,110㎡です。

遺構は地表から１m以上掘り下げた標高約14.5mで見つかりました。

調査の結果、検出した遺構総数は137基、出土遺物は浅箱で20箱ありました。遺構・遺物とも主な時代は古墳時代前期で、一部平安時代もあります。古墳時代前期の遺構は竪穴建物６棟、性格不明遺構18基、溝跡１条、土坑11基、ピット20基が見つかりました。平安時代の遺構は溝跡１条、ピット５基があります。

弥五郎遺跡の遺構の残りは非常に悪く、右の写真のように深さ５cmほどしか見つけられませんでした。土の堆積をよく観察したところ、遺構を川砂などが覆っていることから、おそらく周辺の川の氾濫などで遺跡の土が削り取られ、失われたものと考えられます。

遺物は古墳時代の遺構から土師器の甕、管玉、炭化米が出土しています。炉に埋設された土師器の壺や直径５cmほどの大きさのミニチュア土器も１点出土しています。炉に埋設された土師器の壺は東海系の可能性があり、また炉に据える類例は少なく、今後の整理で詳しく調べる予定です。

平安時代の遺物では土師器・須恵器のほか、羽釜も見つかっています。須恵器には墨書の残るものもありますが残念ながら判読不明でした。

以上の調査成果から、弥五郎遺跡では古墳時代前期（３～４世紀）には、竪穴建物が作られ集落を形成していたことがわかりました。上越市域では、妙高山に連なる麓に弥生時代中期中葉から古墳時代前期の国指定史跡斐太遺跡群が代表的な遺跡であり、弥生時代中期の玉作工房がある吹上遺跡と弥生時代終末から古墳時代初頭の大規模な環濠集落の釜蓋遺跡などで構成されています。

また、弥五郎遺跡の周辺の平野部でも多数の古墳時代前期の遺跡が調査されており、本遺跡との関係に興味が持たれます。

（株式会社イビソク青木　誠）

弥五郎遺跡２区

竪穴建物と出土遺物（薄黒い部分が建物跡）

炉に据えられた土師器壺

2019年度
整理作業
から

丘江遺跡Ⅶ
出土の茶道具など

所在地：柏崎市茨目３丁目

丘江遺跡Ⅶ（７次調査）は、平成30年度に発掘調査を行い、本年度は発掘調査報告書刊行に向けて整理作業を実施しています。作業を進めるうち、出土した遺物の中に茶道具が一定数含まれていることがわかりました。出土した茶道具には、茶臼（写真１-１～３）や瀬戸美濃焼の天目茶椀（写真１-４）、茶入れ（写真１-５）があります。このほかに茶道具としての利用が想定されるものとして、合子（写真１-６）、瓦器香炉（写真１-７）などが出土しています。

合子は蓋付の容器で、茶道具や仏具として使用され、茶や香などを入れたものです。茶臼（図１）は、碾茶（抹茶の原料）を上臼の供給口に入れ、上臼を回転させ下臼と擦り合わせて挽くことで抹茶にする道具で、現在でもほとんど同じような形のものを使用しています。１・２は安山岩製で、同じ井戸から出土しました（写真２）。擦り合わせ面がぴったりと合うことから、セットで使用されたものと考えられます。径は約30cm、２つ合わせた高さは約23cmあります。また、この茶臼で注目したいところはどちらも意図的に割られている可能性があることです。１については、割られたあと、さらに火を受けたことで全体に煤が付着しています。このように意図的に壊された茶臼を井戸に埋めた様子は、当時のモノを捨てる時の祭祀行為を知る上で重要です。

茶（喫茶）の文化は、８世紀（平安時代初め）ころに遣唐使によって中国から伝わったとされます。一度は衰退しますが、鎌倉時代初期に臨済宗 開祖の栄西によって再び中国から茶の文化が入り、寺院や武家を中心に広がります。その後、室町時代から江戸時代にかけて茶の文化は庶民へと広がっていきますが、抹茶は比較的上流階層が好んだようです。

丘江遺跡Ⅶで出土した茶道具は14世紀後半から15世紀（室町時代）ころのものと考えられ、ちょうど茶が一般に浸透し始める時期にあたります。しかし、茶入れや合子・香炉といった優品の存在や抹茶を作る茶臼を持つことなどから、丘江遺跡Ⅶは有力者が住む集落であったと想定できます。また、同じ時期の茶臼が過去の丘江遺跡の調査や、丘江遺跡の北に位置する山崎遺跡などでも出土しており、このころの柏崎にお茶の文化が広がっていたことを示しています。

（株式会社大石組　南波　守）

写真１　出土した茶道具など（１～３：茶臼　４：天目茶椀　５：茶入れ　６：合子　７：香炉）

写真２　茶臼（上臼）出土状況

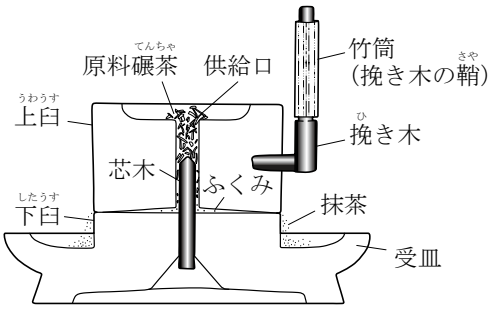

図１　茶臼の構造と部位名称
（三輪茂雄1978『臼（うす）』を加工）

埋文
コラム

石井荘と墨書土器

石井荘は天平勝宝五年（753）には成立していた東大寺領の荘園です。越後国には頸城郡に石井荘・吉田荘・真沼荘の３荘、古志郡に土井荘の合計４つの東大寺領荘園が存在しました。天暦四年（950）の「東大寺封戸荘園并寺用雑物目録」によると石井荘の荘田は約65町（１町は約108m四方）で、これは越後国の東大寺領荘園約113町の半分以上を占め、越後国最大の東大寺領荘園でした。

平安時代の終わりころ、永治元年（1141）をそれほどさかのぼらない時期に、石井荘は土井荘とともに越後北部の沼垂郡豊田荘（加治荘）と交換され消滅しました。石井荘の所在地については、関川右岸の上越市三和区周辺とする説や関川左岸の高田市街地周辺とする説がありました。

2006年に北陸新幹線建設に伴い、高田市街地の南西約２km、上越市大字向橋に所在する岩ノ原遺跡の発掘調査が行われると、８世紀中葉から９世紀末ころの倉庫跡を含む掘立柱建物16棟、井戸1基などが検出され、多くの墨書土器が出土しました。この中には「石井庄」７点、「石庄」18点「石井」５点、「庄」７点の墨書土器が含まれており、石井荘は関川左岸に存在したことが明らかになり、岩ノ原遺跡周辺には８～９世紀の石井荘の中心施設があったと推測されます。

岩ノ原遺跡のすぐ近くには関川の支流儀明川が流れています。北陸の東大寺領荘園は国府所在郡の河川交通の要所に位置することが多く、石井荘も同様の選地が行われたようです。　（春日真実）

遺跡の北上空から　下が発掘調査地区

「石井庄」墨書土器

岩ノ原遺跡SB049（倉庫跡、西から）

「石庄」墨書土器

埋文
インフォ
メーション

発掘！新潟の遺跡2019展
第24回遺跡発掘調査報告会を開催します

発掘！新潟の遺跡2019展。2019年度に発掘調査・整理報告実施した７遺跡の最新の成果について出土品と説明パネルで紹介します。展示品の多くが初公開となりますので、お見逃しのないよう、ぜひお越しください。

◆ 日　時：令和２年１月10日㈮～３月22日㈰
9：00～17：00（期間中休館日なし）

◆ 会　場：新潟県埋蔵文化財センター
（新潟市秋葉区金津93-1）

◆ 展　示：村上市上野遺跡、阿賀野市山口遺跡、南魚沼市坂之上遺跡・六日町藤塚遺跡・余川中道遺跡、柏崎市丘江遺跡、上越市古屋敷割遺跡の出土品・写真パネルなど

◆ 観　覧：無料

第24回遺跡発掘調査報告会

午前中は2019年度に発掘調査を行った遺跡の最新成果について、発掘担当者がスライドで解説します。午後からは国道8号糸魚川東バイパス・柏崎バイパスの調査成果に関する講演を行います。

◆ 日　時：令和２年３月８日㈰10：00～15：00
（受付開始は10：00）

◆ 会　場：新潟県埋蔵文化財センター研修室
（新潟市秋葉区金津93-1）

【発掘調査報告】10：00～12：00
・村上市上野遺跡（縄文時代後期）
・南魚沼市坂之上遺跡･六日町藤塚遺跡（古墳時代）
・柏崎市丘江遺跡（弥生時代・中世）
・上越市古屋敷割遺跡（古代・中世）

【講演会】13：00～15：00
・ここまでわかった糸魚川の歴史
・ここまでわかった柏崎の歴史

◆ 参加費：無料

◆ 定　員：100名
（申込不要･当日定員になり次第締切）

阿賀野市 山口遺跡 掘立柱建物
（平安時代）

上越市 古屋敷割遺跡 作業風景
（古代～中世）

南魚沼市 余川中道遺跡 出土土器
（古墳時代中期）

柏崎市 丘江遺跡 水田跡
（室町時代）

県内の遺跡・遺物 107

六反田南遺跡出土品　1,202点

平成31年３月22日　新潟県指定有形文化財（考古資料）
遺跡所在地：糸魚川市大和川
遺物保管　：新潟県（新潟県埋蔵文化財センター）

六反田南遺跡は、糸魚川市大和川字六反田の海川右岸の標高３～５ｍの低地で自然堤防上にあります。平成18年（2006年）～25年に発掘調査が行われました。遺跡は洪水堆積物をはさんで３面に分かれ、上層は弥生時代以降、中層は縄文時代中期中葉、下層は縄文時代中期前葉～中葉となります。今回、県指定となったものは中層・下層の出土品です。両層とも竪穴建物・土坑・埋設土器などからなる縄文時代中期の大規模集落で多数の遺物が出土しました。土器は、在地の北陸系の文様を持つ土器を中心に信州系・東北系なども見られ、また、両系の折衷文様の土器は、地域的特徴を良く表しています（写真１）。完全な形に復元できた土器も多く、当地域の基準資料となるものです。土製品では土偶、耳飾りなどが見られます。

本遺跡の最大の特徴は蛇紋岩や透閃石岩製の磨製石斧の大量生産です。石斧及びその生産に用いられた工具（敲石・砥石・石鋸・台石）の材料は、いずれも近くの海岸で容易に採取できます。おそらく他地域への供給を前提とした石斧生産であったと考えられます。この状況は、当地域における縄文時代中期の拠点集落である国史跡の糸魚川市長者ヶ原遺跡・同市寺地遺跡や新潟県境に近い富山県朝日町境Ａ遺跡（出土品は重要文化財）と共通しています。

さらに下層と中層で磨製石斧の製作技術の変化が明らかになったことも重要です。下層では平たい石を斧の形に切り出す擦切技法（写真２）を用いた生産が盛んで、中層では同技法は姿を消し、石を敲いて斧の形に整える敲打技法に集約されるようになります。糸魚川周辺から各地に磨製石斧が運ばれた一方、信州産・富山県魚津産・伊豆神津島産の黒曜石、東北産の琥珀が当遺跡に持ち込まれたことが科学分析によって明らかになっており、物流が双方向であったことを示しています。

この他、生活道具と考えられる石器には、打製石斧、石鏃、石錐、石錘、石皿、磨石類などがあり、一般集落と変わりありません。石製品では玉類のほか、中層出土の大型の石棒（写真３）は県内最大の大きさです。また、出土した動物骨は魚類が圧倒的に多く、ほ乳類が少ないことが分りました。多くの海産の魚種が認められ、土器に貝類を模した文様が見られるなど海辺のムラであることを示しています。

糸魚川地域で集約的に生産された磨製石斧の流通や交流を探る上で、本遺跡出土品が果たす学術的価値は質・量ともに極めて高いと言えます。

六反田南遺跡出土品は、新潟県埋蔵文化財センターで一部を展示しています。　（高橋　保）

写真１　さまざまな形、文様の土器
中央大型台付鉢：高さ39cm

写真２　擦切技法による切断
左下：長さ13.5cm

写真３　石棒
高さ：101.1cm

写真3点　photo by T.OGAWA

埋文にいがた 第109号　令和元年12月26日発行
発行　新潟県埋蔵文化財センター　Niigata Prefecture Archaeological Research Center
指定管理者：公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1　TEL：(0250)25-3981　FAX：(0250)25-3986
E-mail：niigata@maibun.net　URL：http://www.maibun.net/

『埋文にいがた』のバックナンバーは（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 HP でご覧いただけます。
上の URL からご確認ください。